

A・B：どうも～「一つ違い」です。

A：さて、今年で100周年、おめでとうございます。

B：しょっぱなから何やねん。

A：戦艦「比叡」が完成して100年です。夏目漱石が留学したイギリスで作られた、金剛型の戦艦ですよ。

B：「艦隊これくしょん」マニアの知識を披露してどうするねん。ここは戦艦やのうて、本を紹介するところやぞ。

A：すいません。漱石と100周年をからめようと思ったんですが…

B：それを言うなら、漱石の『ころ』が新聞に連載されて100年らしいな。高校の教科書にも載ってたよな。

A：それがですね、教科書には上中下の3部構成のうち、下の部分しか載ってないんですよ。

B：たしか、内容は先生から語り手のわたしに届いた手紙やったよね。

A：手紙の中身は原稿用紙200枚分ぐらいの遺書なんですけど…

B：手紙にしては長過ぎや。だいたい封筒に入り切らへんやろ。んんっ、ちょっと待って。遺書って先生死んでるやん。

A：そうなんですよ。なので今回は、教科書しか読んだことのない人もいるでしょうから、前半の先生とわたしの交流について紹介しようかと…

B：よっしゃ。(口調を変えて) あれは夏だったね、きみ。

A：(驚いて) えっ!!いきなり先生のセリフですか？

B：驚いてんと、きみがわたしをやれ。

A：きみがわたしって、ややこしなあ。きみがわたしで、わたしがきみで、あなたはいったい誰なのさ。(自身はどこに行ったのさ。)

B：やかましわ。

A：すいません。(気を取り直して) あれは鎌倉の海水浴場でした。先生は西洋の人と二人でお戯れ、わたしはそれが気になって気になって、毎日海辺に出かけては、先生が一人になるのを待っていました。

B：なんか気持ち悪いな。

A：ようやく先生が一人で海に入るのを見つけて、わたしは先生の後を追いました。

B：なんやストーカーか。

A：沖合でやっと二人きりに。

B：それできみが声をかけてきたんや。

A：「愉快ですね」

B：何が愉快やねん。初対面でいきなり、訳分からんかったぞ。しかしまあ、それで知り合いになって、ボクが鎌倉から東京へ帰るとき、

A：「これから折々お宅へ伺っても宜ごさんすか」

B：「ええいらっしやい。」と答えたのが運の尽きや。

A：運の尽きやなんて先生、つれないですよ。

B：何言うてんねん。それから毎週毎週3日も4日もうちに来るとは、きみは何してるんや。

A：わたし、学生ですわね。

B：そら暇やな。こっちが墓参りに行こうとすると、すぐ付いて来る言うし、

A：だって、「私は先生といっしょにあすこいらが散歩してみたい」

B：「私は墓参りに行くんで、散歩に行くんじゃないですよ」

A：「しかしついでに散歩をなすったらちょうど好いじゃありませんか」

B：しつこい奴は嫌われるぞ。ほな続きいくで「君は恋をしたことがありますか」

A：あときはびっくりしましたよ先生。急にそんなこと言われても…

B：「君、恋は罪悪ですよ。解っていますか」

A：そこがよく分からないんですが…

B：「もう解っているはずですよ。あなたの心はとっくの昔からすでに恋で動いているじゃありませんか」

A：え!?で、でも…

B：「あなたは熱に浮かされているのです。熱がさめると厭になります。私は今のあなたからそれほど思われるのを、苦しく感じています」

A：先生！好きや～（抱きつこうとする）

B：（スルッとよけて）アホか。『こころ』は男同士の恋バナとちやうぞ。

A：あれっ、なんかおかしいです。もっと深刻な話ですよ。

B：そやな、セリフは『こころ』の文章そのままやけどな。もっぺん最初からやってみよか。「あれは夏だったね、きみ」

A：しつこい奴は嫌われますよ。

B：それはオレがお前に言ったことやないか。もうええわ。

A・B：どうもありがとうございましたー。